
青藍執事の秘密

灯都和

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

青藍執事の秘密

【Nコード】

N2485BA

【作者名】

灯都和

【あらすじ】

「姫様。俺はあなたの願いなら、なんだつて叶えます」かつてあらゆる小国を攻め滅ぼした、「鬼の国」とも云われる過激な国ベルリガ帝国。そんなベルリガ帝国の姫君 エティシラが16回目の誕生日を迎えた時、彼女のもとに“新しい執事”がやって来た。「本日から、あなたにお仕えさせて頂く”執事”でございます」そう言っただけで微笑む青眼の男ラオヴァルトは、ある秘密を抱えていて。

第一話（前書き）

タイトルは「せいらんしつじのひみつ」と読みます。

第一話

まだまだ春には程遠い、二月三日。凍てつくような寒さのこの日、ベルリガ帝国の宮廷は一段と賑わっていた。

特に、国王ダーフィットと王妃コスタの高揚ぶりは相当のものであった。

それもそのはずだ。

今日はただ一人の子供である姫君エティシラの、16回目の誕生日なのだから。

「エティシラももう15歳とはなあ！」

グラスに注いだワインを一気に飲み干し、父が言った。

何百人もの使用人がずらりと並んだ大広間では、エティシラの誕生日パーティーが行われていた。

薔薇の紋様が施された正方形のテーブルを囲む、臙脂色えんじの大きいソファが四つ。

国王家族はその中の三つに、贅沢にも一人ずつ腰掛けている。

「ちよっとお父様、間違えないでよ。わたしは今日16歳になったのよ」

いつものものより少し値が張る桃色のドレスを纏った姫、エティシラは、真剣な表情で父に抗議するが、すっかりほろ酔い気味の父は「すまんすまん」と赤い顔で呑気に笑い出した。

今回の誕生日パーティーは、エティシラ本人の希望ではなく、娘を溺愛する両親が催したものだ。余計な金がかかるから……とエティシラは遠慮したのだが、半ば強引に催された。

溢れんばかりの愛情を注いでくれるのはとても嬉しいのだが、正直なところ早く終わってほしかった。

つい先程まで、自分の誕生日を祝うべく宮廷を訪れてくれた様々

な客人の対応に追われっぱなしだったエティシラは、もうすっかり疲れきっている。

だから、休みたかったのに　このパーティーが終わらない限り、エティシラは休むことができない。

パーティーが終わって部屋に戻ったら、すぐにブルーノに愚痴をこぼそう……。

エティシラは大広間を見渡し、ブルーノの姿を捜す。

“ブルーノ”ことブルーノ＝デリウスは初老の男性で、エティシラの執事だった。

温和な性格のブルーノは、どんなワガママだって聞き入れてくれる。エティシラにとっては祖父のような存在だ。

「……あれ？」

かなり入念に捜したのだが、ブルーノの姿はどこにも無かった。

おかしいな、とエティシラは目を凝らして再び大広間を見渡すが、やはり彼は見当たらない。

「ブルーノは？」

誰に対してでもなくぼつりと呟くと、彼女の母が平然な顔で答えた。

「ブルーノなら、本日付けであなたの執事を辞めたけれど」

「辞めた!？」

勢い良くソファから立ち上がり、エティシラは思わず声を荒げる。

「ええ、辞めたのよ。奥さんが病気にかかってしまったらしいわ。だから、執事を辞めて奥さんの看病に努めるんですって」

「そんな……」

淡々と事実を述べる母に反して、エティシラはかなり落ち込んでいた。

ずっと、昔から。

少なくとも物心がついた頃には傍にいて、いつも自分の面倒を見

てくれたブルーノ。

両親には言えないようなことも彼になら話せた。相談にもたくさん乗ってくれた。悪戯いたずらだつて数えきれないほどしてきたが、ブルーノは「姫としてあるまじき行為ですよ」説教をする代わりに両親には黙っていてくれた。

彼は執事であると同時に、一番の理解者だつた。

それなのに 何も言わずに、自分のもとから去って行ってしまふなんて。

「……あんまりじゃない。わたしに、一言くらい言ってくれたって良かったのに……。ひどいわよ」

ブルーノと数々の思い出を胸に、エティシラはややくきつく唇を噛み締めた。

「仕方ないさ。きつとお前に言つたら、絶対に引き止められると思つたのだろう。それに、余計に別れが辛くなるからな」

少し酔いが覚めてきた様子の父が、エティシラを宥なだめる。

「それに、安心しなさい。ちゃんと“代わり”は用意してあるよ」「代わり?」

父の言葉を暗唱して首を傾げたのと、大きな扉がギイイ……と音を立てて卒然と開いたのは 同時だつた。

エティシラは父の返事を待たずに、少し遠い扉の方へと視線を移す。

よく晴れた青空の上に、海の藍色を被せたような青藍色せいらんだつた。

距離があつてもよく見える、開いた扉のもとに佇立する男の瞳は。

「姫様」

聞く者を陶醉させてしまふような、透明感のある声で男は言った。

身に纏った燕尾服えんびふくと同じ、黒色の革靴で高級フローリングの床を歩き、呆然としているエティシラの元へゆつくりと近づいてゆく。サファイアの宝石のように美しい青藍色の瞳は、近くで見るとより一層美しく思えた。

黒い髪に、黒い服装。全身を黒一色で包んでいるからこそ、その青い瞳の美しさが余計に際立つのだ。

男は靱しなやかな動きで屈みこみ、その青眼でエティシラをまっすぐに見上げる。

「だ……誰……？」

よつやくエティシラの口から放たれた問いに、「お目にかかれて
光栄です」と男はふつと微笑む。

「俺はラオヴァルト＝デリウスと言います。本日から、あなた
にお仕えさせて頂く”執事”でございます」

そのまま彼女の手を取り、ゆつくりと優しいキスを落とした。

第二話

午後九時を過ぎた頃、エティシラの誕生日パーティーは終わり、主役の姫はくたくたになって部屋へと戻ってきた。

チユールレースをあしらった大きな純白のベッドに、抱きつくように飛び込む。

「ああ疲れた。このパンプスね、18cmもヒールがあってもんのがすんごく足が痛いよ。それなのに、お父様が履けて云うから履いてあげたの」

ドレスと同じ桃色のパンプスをぶんぶんと上下に振り、エティシラは愚痴をこぼした。

「女性靴の云々は、男の俺にはよく分かりませんが……すごく痛かったんでしよう？ よく頑張りましたね」

「そうよ。わたし頑張ったのよ、ブルー……」

ブルーノ、と言いかけてはっとする。

もうブルーノはいないのだ。

「姫様。俺はブルーノではなくラオヴァルトです」

代わりに目の前に居るのは 苦笑しつつパンプスに手を添える、もつとずつと若い執事だった。

小さい布でエナメル素材のパンプスを入念に磨きこんで、右足の方だけを脱がせた。

続いてラオヴァルトは、左足のパンプスを磨きこむ作業に集中し始める。

「そ、そうだったわね」

ごほん、とわざとらしく咳払いをして、エティシラは腕を組む。

「とにかくね、わたし、こんなんでも一日中我慢してたんだから！」

「そうですか」

「そつよっ」

「……」

「……」

妙な沈黙が流れ、エティシラは黙々と靴磨きに精を出している執事を見下ろす。

ラオヴァルト「デリウス。」

彼はその姓が表すように、ブルーノの孫息子だった。

ラオヴァルトはエティシラの世話をブルーノから託され、彼の代わりの「新しい執事」としてエティシラの元へやって来た。

エティシラはラオヴァルトとはまったくの初対面である。けれど、ブルーノの孫と云うだけで一抹の安心感を覚えてしまうのだから不思議だ。

「それにしても、あまり似ていないのね。ブルーノと」

エティシラの言葉に、ラオヴァルトの青藍色の瞳が僅かに揺らぐ。

「よく言われます。俺、母方の血を強く受け継いでいるみたいで」

ブルーノと云えば、白髪混じりの頭髮に濃緑色の瞳のどこにでもいるような老人だ。

決して整った顔立ちとは云えないし、若いころだってそう美男子だった訳ではないだろう。

けれど孫のラオヴァルトは、どこかの役者のように凜たたくとしていた佇まいで、整った容姿をしている。とてもブルーノの孫とは思えない。

ここで、ひとつの疑問がエティシラの頭を擡もたげる。

同じ血が流れているはずなのに、似ても似つかない外見のブルー

ノとラオヴァルト。

それなら、内面は 性格はどうなのか。

「ねえラオヴァルト、頼みがあるんだけど。聞いてくれる？」

ちょうどラオヴァルトが靴磨きを終えたところで、エティシラは試すように言った。

「姫様のお願いでしたら、なんでも聞きますよ」

ラオヴァルトは先刻のように柔らかく微笑む。

快く受け入れてくれるあたり、彼もブルーノ同様優しい性格なのかもしれない。

「あのね。この後、九時半から歴史のお勉強の時間なんだけど今日はものすごく疲れているから、サボ……休みたいのよ。だからラオヴァルト、ア二先生が来たら“エティシラは高熱のため今日は休みます”って言うておいてちょうだい。も、もちろん面倒だからって訳じゃないのよ？」

そう油断して、ぺらぺらと喋ってしまったのが間違いだった。

「駄目です。祖父から授かったデータを見るに、姫様はいつも何かと理由をつけては勉強を怠^{おそ}っているようですね。俺は知能レベルの低い姫様を放^{はな}つて置くことはできません。寝言は寝て言うてください」

ラオヴァルトは一切の迷いもなく、すらすらと言葉を紡いだ。

一体どこからそんなに豊富な言葉が湧いて出るのだろう、と感心してしまうほどに多弁だ。

「わ、私の頼みを聞いてくれるって言ったじゃないっ！」

エティシラは饒舌な執事を、びっ！と指差す。

「聞くとは言いましたけど、頼みを引き受けるとは言っていないですよ？」

「~~~~っ」

「祖父はいつも姫様を見逃してあげていたようですが、俺はあなたを見逃しませんので。暖かいハーブティを用意しておきますから、ちゃんとお勉強してきてください」

ラオヴァルトは依然、浮かべた微笑みを崩さないままだ。

……ラオヴァルトもブルーノのように優しい、なんて一瞬でも思った自分が馬鹿だったらしい。

とんでもない曲者だ。知能レベルが低いとまで言われた。

それでもどうにかして勉強から逃げたかったエティシラは、どうしようか　としばし思い悩む。

「エティシラ様！」

しかし、勉強の世界へ誘う使者は乱暴にドアを開いてやってきてしまった。

「ア二先生……」

「おっと！ 今日には仮病を使わずに、ちゃんとお部屋で待っていたのね。えらいえらい！ さ、勉強をしに行きましょう」

かっちりとしたスーツを身につけている、ア二先生と呼ばれた中年の女性は、エティシラの手をぐいぐいと引っ張って廊下へ連れ出す。

この部屋から少し離れた場所にある、図書館部屋へ連れて行くつもりなのだ。

「い、嫌！」

エティシラは助けを求めるようにラオヴァルトに視線を投げるが、彼に動き出す気配はない。

「まあまあ。姫として、ある程度の教養を身につけておくのは大事なことですよ」

「ちよつとお、助けてよラオヴァルト！！」

「　　いつてらっしやいませ、エティシラ様」

ラオヴァルトは姫の嘆願を涼やかな表情で受け流し、ドアが閉まるまで頭を下げていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2485ba/>

青藍執事の秘密

2012年1月6日14時49分発行